

慶應義塾大学文学部 3つの方針

【人文社会学科・独文学専攻・学士（文学）】

学位授与に関する方針（ディプロマポリシー）

〈教育目標〉

慶應義塾大学の卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を前提とし、高度で実践的なドイツ語運用能力の習得を前提に、ドイツ語・ドイツ語文学を中心とする広大で多彩なドイツ語圏諸文化現象の探究を通じて、流動化する国際社会においてよりよく生きるための教養と学識、倫理的判断力と実践的能力を培うことを目標とする。加えて、教育課程において定める要件を満たした学生に対し、学士（文学）の学位を授与する。

〈資質・能力目標〉

資質・能力目標(1)： 文法構造の理解と基本的な語彙の習得を基盤に、四技能（読み、書き、聴き、話す）のバランスがとれたドイツ語運用能力を身につけ、これを通じてドイツ語母語話者との活発な異文化コミュニケーションを実践する力。

資質・能力目標(2)： ドイツ語および日本語による関連文献を通じて、ドイツ語学・文学研究ならびにドイツ語圏の文化現象全般に関する総合的知識を獲得し、この知識を基盤に当該領域に関する問題を発見・設定する力。

資質・能力目標(3)： ドイツ語固有の論理構造およびドイツ語文化圏の歴史的、文化的特性を理解することによって、日本語および日本文化を相対化する視点を獲得し、自文化に関する反省的思考を深め、これを通じて得られた異文化リテラシーを生かし、社会人として国際社会に貢献する力。

資質・能力目標(4)： 明確な問題意識を持ち、自ら発見・設定した問題の解決に至る思考の過程を、先行研究を踏まえて日本語またはドイツ語で論理的に記述した卒業論文を作成する力。

〈卒業論文における審査項目〉

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は、次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラムポリシー）

〈教育課程の編成〉

文学部人文社会学科独文学専攻（学士：文学）は、「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」に掲げる資質・能力を養成するために、第2学年においては専門研究の基礎力を培う専門教育科目、第3・第4学年においては学生個々の関心領域に応じた学修が可能となるよう多様な専門教育科目を、必修科目、選択必修科目、選択科目の3種に分類して設置し、これらから構成される教育課程（カリキュラム）を体系的に編成する。

〈教育課程の実施〉

この教育課程の編成のもと、以下の教育方法を組み合わせて教育を実施する。

- (1)独文学専攻の専門教育課程においては、文学部共通語学カリキュラムを通じて獲得された技能をさらに発展させ、より高度な言語運用能力を養成するため、第2学年以降、「読解」、「文章作成」、「聴解・口頭表現」にそれぞれ重点を置いた科目群をレベル別に多数設置する。すべて少人数による演習形式の授業であり、かつドイツ語母語話者の担当率も高くする。これらの科目を段階的に継続して学修することにより、言語運用の四技能がバランス良く修得できるよう配慮する。
- (2)ドイツ語学、ドイツ文学、ドイツ文化学の領域に関しても、3年間の専門教育課程を通じ、段階的に専門的知識を深めることができるようカリキュラム設計を行う。
- (3)専門教育課程における学修の成果を卒業論文の形で結実させるため、第3学年・第4学年にゼミナールを設置する。

〈学修成果の評価方法〉

本専攻の教育課程により修得すべき資質・能力目標に対する学修成果の評価は、全塾としてのアセスメントプランの考え方のもと、各科目において定める成績評価基準等に基づいた直接的な指標により行われるほか、各種アンケートや調査等を含めた定量的・定性的、直接的・間接的な指標を用いて評価される。具体的には、①学生による授業評価、②入学経路別成績分布調査、③休学や退学の状況、④プレイスメントテストなどを用いる。

〈資質・能力目標と教育内容との関係〉

資質・能力目標(1)： 文法構造の理解と基本的な語彙の習得を基盤に、四技能（読み、書き、聴き、話す）のバランスがとれたドイツ語運用能力を身につけ、これを通じてドイツ語母語話者との活発な異文化コミュニケーションを実践する力。

→ 総合教育課程に設置の必修外国語科目「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ」（第1学年）、「ドイツ語Ⅲ・Ⅳ」（第2学年）を通じて育成された基礎的運用能力に加え、独文学専攻では、読解能力に重点を置いた「テキスト研究中級Ⅰ・Ⅱ」、「テキスト研究上級Ⅲ・Ⅳ」、文章作成能力に重点を置いた「ドイツ語作文初級Ⅰ・Ⅱ」、「ドイツ語作文中級Ⅰ・Ⅱ」、「聴き・話す」インターアクションに重点を置いた「コミュニケーション・ドイツ語中級Ⅰ～Ⅳ」、「コミュニケーション・ドイツ語上級Ⅰ～Ⅳ」（ドイツ語母語話者が授業担当）を設置し、定められたカリキュラムに沿って学修を進めることで四技能のバランスがとれたドイツ語運用能力と、異文化コミュニケーション能力が着実に体得できるよう配慮する。

資質・能力目標(2)： ドイツ語および日本語による関連文献を通じて、ドイツ語学・文学研究ならびにドイツ語圏の文化現象全般に関する総合的知識を獲得し、この知識を基盤に当該領域に関する問題を発見・設定する力。

→ 第2学年においては、文学史の概括的知識（「ドイツ文学史Ⅰ・Ⅱ」）や文学テキスト読解のストラテジー（「テキスト研究中級Ⅰ・Ⅱ」）、ドイツ語学・文学・文化研究のアカデミック・リテラシー（「ドイツ研究の技法Ⅰ・Ⅱ」）等を修得する科目群を配置し、第3学年・第4学年においては、ドイツ言語学（「ドイツ語学研究Ⅰ・Ⅱ」「ドイツ語学演習Ⅰ・Ⅱ」）、中世ドイツ文学・文化（「中世ドイツの言語と文化Ⅰ・Ⅱ」）、近代・現代ドイツ文学（「テキスト研究上級Ⅰ・Ⅱ」）近代・現代ドイツ文化（「ドイツ文化研究Ⅰ・Ⅱ」「ドイツ文化史Ⅰ・Ⅱ」「近代ドイツ研究Ⅰ・Ⅱ」）、近代・現代ドイツ思想（「ドイツ思想研究Ⅰ・Ⅱ」）、ドイツ演劇学・メディア学（「演

劇・メディア研究Ⅰ・Ⅱ」、現代ドイツ事情（「現代ドイツ研究Ⅰ・Ⅱ」）等に関する多彩な科目群を、講義形式・演習形式共に多数設置し、学生が個々の関心ないし問題意識に応じて学修を設計できるよう配慮する。また、これら専門の講義科目・演習科目の一部をドイツ語母語話者である専任教員・有期教員・非常勤教員の担当とすることで、ドイツ語によるプレゼンテーションや議論の実践的学修を可能とし、ドイツ語圏の大学への留学を希望する学生にとって格好の訓練の場とする。

資質・能力目標(3)：ドイツ語固有の論理構造およびドイツ語文化圏の歴史的、文化的特性を理解することによって、日本語および日本文化を相対化する視点を獲得し、自文化に関する反省的思考を深め、これを通じて得られた異文化リテラシーを生かし、社会人として国際社会に貢献する力。

→ ドイツ言語学分野の科目群（「ドイツ語学研究Ⅰ・Ⅱ」「ドイツ語学演習Ⅰ・Ⅱ」）は言語コミュニケーションの媒体としてのドイツ語を多様な視点から客体化しつつ探究することによって、同時に日本語および日本文化を相対化する視座を与える。また、日本人教員・ドイツ人教員によって提供される上記の多彩な専門教育科目は、それぞれに二つの言語文化圏について不断の反省的思考を刺戟し促進する。加えて異なる環境を通じて高度な異文化リテラシーを身につけるために、慶應義塾大学国際センターによって提供される留学プログラム、さらには学内外の各種留学制度などを活用した海外の大学への短期留学または1年間の留学を推奨する。海外の大学への正規留学によって取得した単位を、単位数を限って卒業要件に含めることを認める。こうして育まれた異文化リテラシーは、流動化がますます顕著になる今日の国際社会において、独文学専攻卒業生が確固たる立脚点と柔軟な思考を兼ね備えた社会人として活躍するための前提を形成するものと期待される。

資質・能力目標(4)：明確な問題意識を持ち、自ら発見・設定した問題の解決に至る思考の過程を、先行研究を踏まえて日本語またはドイツ語で論理的に記述した卒業論文を作成する力。

→ 学生は第2・第3・第4学年と学修を進めるに従って、ドイツ語圏文学・語学・文化についての幅広い基礎知識およびドイツ語圏研究の作法を基盤に、上記の専門教育科目群からそれぞれの関心に応じた領域の科目を主体的に選び、重点的かつ批判的に学修する。そして最終的には自ら問題を設定してこれを深く追究し、その成果を卒業論文にまとめあげる。卒業論文の作成に当たっては、「ドイツ語学文学ゼミナールⅠ～ⅩⅥ」を第3・第4学年の4学期に亘って履修する。第3学年においては複数教員の「ゼミナール」を履修し、問題の設定から解決に至る流儀や方法に複数の視点があることを学ぶと同時に、自分の取り組むべき問題設定を行う。第4学年においては第3学年で履修した「ゼミナール」のなかから、卒業論文指導教員担当の「ゼミナール」を選んで履修し、当該教員との活発な議論を通じて、設定した問題の論理的展開・学問的検証を実践し、3年間の独文学専攻専門教育課程における学修の総決算としての卒業論文を完成させる。

入学者の受入れに関する方針（アドミッションポリシー）

〈求める学生像〉

- (1) 慶應義塾の精神に対する十分な理解、および学問に対する意欲と向上心を持つ。
- (2) 先人による古典類から最新の研究成果が書かれた論文に至るまでの諸文献を読み込み、理解するための基礎となる語学力（日本語、および英語・フランス語・ドイツ語）を身につけている。
- (3) 与えられた課題に対して論理的に思考し、それに対する自分の考えを正確かつ十分に記述する能力を有する。
- (4) 現在の社会や文化の成り立ちを理解するための基礎となる歴史的な知識（日本史または世界史）を持つ。

- (5)文学部が設置している専攻（哲学、倫理学、美学美術史学、日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学、国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学、図書館・情報学、社会学、心理学、教育学、人間科学）が対象とするいずれかの学問に対する関心・好奇心を有する。

〈選抜の基本方針〉

このような入学者を幅広く受け入れるため、(1)一般選抜、(2)自主応募制による推薦入学者選考、(3)外国人留学生対象入学試験により選抜を実施する。

(1)一般選抜

外国語・地理歴史・小論文の三科目の試験による選抜であり、文学部にふさわしい高い学力を要求する。

(2)自主応募制による推薦入学者選考

高等学校で一定の評点に達していることを条件に、在学中の活動実践や社会的活動をも加味した総合的な考查によって選抜する。

(3)外国人留学生対象入学試験

学業成績と勉学意欲を勘案した選抜を行う。